



2016年2月1日発行(通算第80号)特別版

連絡先 〒145-0061 大田区石川町1-26-8

発行 呑川の会 代表 高橋光夫

呑川の会 e-mail: mitsuo.takahashi@nifty.com

呑川の会 HP <http://home.m00.itscom.net/nomigawa/>

高橋会員 HP <http://homepage2.nifty.com/aoiyume/>

の み が わ



当会の会報「のみがわ」は、年に4~5回定期的に発行し、会員の皆様を始め、図書館・小学校や関係者に配布しています。この特別号は、会員に限定して発行します。(文責:工藤 英明)

大坪 庄吾 さんを偲んで

—2016年1月20日 逝去—

呑川の会 代表

高橋 光夫

一部の皆さまにはお知らせしましたが、悲しいお知らせをしなければなりません。

「呑川の会」創立者の一人であり、初代から10年以上代表を務められた「大坪庄吾さん」が神に召されました。

81才の若さで、10日ほど前の2016/1/20に他界され、その衝撃はまさに「巨星、墜つ」でした。

たくさんの活動に積極的に参加され、それぞれの団体で要職を務められ、思わぬ突然の成り行きに、途方に暮れている団体や関係者も多いと思います。

私の知ることはわずかですが、この機会に大坪さんを偲んで、振り返ってみたいと思います。

1) 前夜式



1/24 夕刻に「久が原教会」

(大田区・久が原)で「前夜式」が執り行われました。

た。

大坪さんの奥さまに言わせると、夫は「洗礼」を受けていないので、厳密にはクリスチャンでは無いけれど、気持ちはキリスト教の教えと軌を一にするものだったそうです。

礼拝堂はぎっしりの人で埋め尽くされ、座る席が無く、後ろで立っている方も多数でした。

さすがに、大坪さんの活動の広さ、人脈の広さを物語るものでした。



祭壇に飾られた大坪さんは、柔和な微笑をたたえ、私たちにほほえむような良い写真で、「献花」で前に立ったとき、思わず話しかけたくなるような気持ちになりました。

式は、大坪さんが初めて覚えたという「さまよう人々」を初め、多くの「賛美歌」が歌われ、「祈り」が捧げられました。

2) 大田・平和のための戦争資料展



これは、大坪さんのライフワークとも言える「大田・平和のための戦争資料展」での大坪さんです。この時はとても忙しそうに、あちこち動いておられました。

大坪さんの肩の後ろにちょっと見える方は、奥さま（大坪福子さん）で、テーブルに張られた黄色い紙には「手作りクッキーをどうぞ」と書かれています。

ています。

奥さまは、日曜礼拝に教会へ向かうとき、自宅で作られたクッキーをたずさえ、教会への「献金」のよすがとされたそうです。

私は、「都市河川」の現状と、「戦争」とは切っても切り離せない関係があるので、時々「資料展」を見に行きました。

（「都市河川と戦争」については、毎年開かれる「呑川講座」で、私が担当する「呑川現代史」で解説をしています。）

この「大田・平和のための戦争資料展」は、各地で開かれている資料展と比べものにならないほど充実した、規模の大きなものです。ですから、これほどの資料をどこにしまってあるのか、不思議に思っています。

した。ところが、ある時、その秘密が判りました。

呑川の源流の一つに「洗足池」があります。

ここから流れ出す水は、「洗足流れ」を通して、現在も「呑川」に注いでいます。

この「洗足池」のほとりに、日蓮が立ち寄ったという「袈裟掛けの松」が境内にある「日蓮宗・妙福寺」（御松庵）があります。この「妙福寺」のご住職で、東京立正短期大学・学長の藤井教正（ふじい・きょうしょう）さんが数年前亡くなられたとき、私もそのお葬式に出掛けたのですが、その時大坪さんも来られていました。どんなご関係かと伺ったら、「戦争資料展」の膨大な資料を、この「日蓮宗・妙福寺」さんに預かってもらっているとのことでした。

宗派は違えど、大坪さんの持つ幅広い人脈を再認識しました。

「前夜式」で、礼拝堂が人であふれんばかりになった背景がよく判りました。

しかし、大坪さんが心血を注いだ「大田・平和のための戦争資料展」は、81才のお身体に、大きな負担を与えたようです。昨年（2015年）の「資料展」は8月のお盆の時期でした。その片付けも終わって、2週間後、ご夫婦で「奥多摩ハイキング」に出掛けられたそうです。

心を癒やす、そのホッとしたつかの間のひとときに、突然病魔が襲ったのです。（9月1日）倒れて現地・奥多摩の病院に入院し、翌日荏原病院に転院されてからは、入退院を繰り返し、4ヶ月過ぎた後に帰らぬ人となったのです。なんと、残念で、無念だったことでしょう・・・

3) 大坪さんとの出逢い（遺跡発掘現場で）

私が思い出すのは、大坪さんと出会い初めの頃です。1990年代、私はようやく郷土の歴史に興味を持ち始めました。とりわけ文化財や遺跡に関心がありました。



ここは、「雪が谷貝塚」です。

オオツノジカやイノシシの動物の骨の他に、カキやハマ

これは久が原の遺跡で、見えるのは「横穴墓」です。マンション建設で発見されましたが、その規模といい、遺物の多さといい、ビックリしました。

「古墳時代・後期」になると、この地域の集落も大規模に発展していたのです。



グリなどの海の産物も多く見られ、縄文時代は少なくとも「雪が谷」地域までは、呑川沿いに海が押し寄せて来たことが判ります（縄文海進）。



ここは、中央八丁目で発見された「十二天遺跡」

です。

この場所では、「奈良時代」「平安時代」の遺跡にもかかわらず、ハマグリやハイガイなども発見されています。これはどういうことでしょう・・・

もうすでに、「縄文海進」は終わり、海の位置は現代とほぼ変わらぬ位置、つまり羽田や大森付近まで行って、やっと海に行き当たったはずですが、つまり「十二天遺跡」のある中央八丁目付近では、海岸の砂浜などは無く、貝類は捕れないはずなのです。実は、この時代には「船運」がかなり発達し、「呑川」を通過して海の幸を採りに行くまでに発展していたことが判ります。また、この大田区でも、人々は台地部だけでなく、この時代になって低地部にも住み始めたのです。

こうして「遺跡」を見ることは、この地域の人々の生活や、「呑川」の役割を浮かび上がらせ、私はワクワクしていました。



そんなときに、私は遺跡発掘現場で大坪さんに出逢いました。いつもジャンパー姿で、紙袋を下げている姿が特徴でした。私が現場に行くと、いつも出逢ったのがこのおじさんでした。ただ、特に名前を交わすことも無く、お名前までは存じ上げませんでした。お名前を知ったのは、「呑川の会」でお会いして、「どこかでお目にかかった方だなあ・・・」と、やっと判ったのです。

当時は、デジカメなど持っていないで、どこへ行っても「24枚フィルム」の枠内での撮影でしたので、自分の家族以外の人を撮ることはほとんどありませんでした。上の写真は、その中で、ようやく探し出した、大坪さんが写っていた1枚です。

こうして、私が郷土の歴史に興味を持ち、遺跡の現場を歩いているときに大坪さんに出逢ったのです。ですから、「呑川の会」が設立され、そこでまた大坪さんに出逢ったとき、私は、大坪さんに教えていたきながら、「呑川の歴史」を解明したいと思っていました。

それは、「新編武蔵風土記稿」を見ても、「呑川は、どこから来て、どこを通過して、どこへ流れた・・・」等と断片的な記述がほとんどでした。

「大森町史」は私は見ていないのですが、「蒲田町史」「池上町史」などを見ても同じような記述と、「新呑川の開削」や、「中土手事件」などいくつかの出来事に触れられているだけでした。

そこで、断片的な呑川の姿でなく、どうしても、呑川の「全体像」や、呑川流域全体の「歴史的変遷」を浮かび上がらせたいのです。

歴史的な文書に載せられている場所をなんとか探し出し、地図にプロットし、流れがどう変わっていったか、その背景に何があったかを、出来るだけ写真を使い、浮かび上がらせたいと思いました。

断片的であっても、せつかく昔の方々が記録に残し、手がかりを与えてくださったのですから、それを元にして、現代に生きる私たちが何も発展させなければ、申し訳ないどころか、怠慢で恥ずかしいことだと

思ったのです。

ところが、「呑川の会」に参加して、大坪代表を初め、「歴史」に強い関心を持っておられる方が多くいることが判りました。また事務局長の榊原さんは、「水質」にとっても熱心で、行政の水質データに頼らず、上流から下流まで呑川の水を自分で「採水」し、「水質検査」をされるほどでした。

しかし、「生物」については、関心を持つ方がほとんど見当たりませんでした。そこで私は、「歴史の解明」を行うより、「呑川の生きもの」を解明しようと自分の役割を変えました。そうは言っても、当時の私は現役のサラリーマン、連日残業に追われ、休日出勤も当たり前で、入会して7年ほどは「定例会」や「行事」に参加出来ないことはしばしばでした。

やっと、「呑川の生きもの」や「生態の解明」に力を入れることが出来るようになったのは、退職してからのここ10年あまりです。

4) 大坪さんの活動（「呑川の会」での大坪さんの姿）



2016/1/24の「前夜式」では、50年を越える友人である長島 保さん（呑川の会・会員でもあります）が、弔辞を述べられました。そばで聞いておられた奥さまは、その言葉の一つ一つに大きくうなずかれていたのが印象的でした。

あとで奥さまにお聞きしましたら、夫の活動の多くは知らない世界だったようで、長島さんが語る夫の世界に想いをはせていたそうです。

それを聞いて、大坪さんが活躍された写真を出来るだけ探し出し、奥さまに差し上げるのが一番良いのかなあ・・・と、思いました。と、言っても、私のところにあるものは「呑川の会」の活動ばかり

ですが・・・



これは、「呑川の会・定例会」に出席された大坪さんです。（右端）いつもキッチンとメモを取られていました。それが最近、目をつむられることが多く、糖尿病のせいもあるでしょうが、お疲れも相当なものだったように感じました。ちなみに、右から3番目の方は可児さんで、葬儀の時にも来られていましたが、大坪さんが「学芸大学」に進学される前、「都立園芸高校」の先輩・後輩の関係にあり

ました。

実は、こんな風に、「呑川の会」設立の時は、大坪さんとの関係がどこかにある方がとても多く、設立がうまくいった背景もそこにあるように思いました。

これは「呑川学習」で、「おなづか小学校」の子どもたちを「呑川の会」が案内をしたときの光景です。

大坪さんは、小学校の教師でしたので、また「おなづか小学校」にも務められた期間は長かったので、特別の親しみを持って子どもたちに語られていました。



これは「雪谷小学校」での「呑川学習」の様子ですが、呑川ウォークを始める前に、大坪さんは、「呑川の概要」を語ってくださいました。直接すぐに歩き出すので無く、ごく簡単にでも「あらまし」を子どもたちに話してあげるのは、とても大切なことでした。

今でこそ、小学校の「呑川学習」は、幅広く広がり、定着していますが、それは、学校と大坪さんとのつながりがあったからこそ、始められたこと

でした。「呑川ウォーク」を中心とした現在のスタイルの「呑川学習」が確立するかなり前から、すでに大坪さんが教える「呑川学習」は、各学校で始められていたのです。

「呑川の会」は、ここ数年「呑川講座」（連続5回講座）を各地で開いています。ここでも、大坪さんの得意分野の「呑川の歴史」を語ってくださいました。

これは、昨年（2015年）4月の「呑川の会・総会」での様子です。（記念写真の一部をトリミングしました）みんないい顔をしています。後列の青いジャンパーを着た方が大坪さんですが、とても元気なご様子で、この5ヶ月後、9月初めに倒れられるとは、夢にも思いませんでした。

5) 大坪さんの研究活動



これは、大坪さんの著作の一つです。

ただ、先に紹介した「雪が谷貝塚」など、比較的新しい発見の遺跡のことは、この時点では載せられていません。

実は、生前、大坪さんにいろいろお聞きしたとき、「今、いろいろの著作物を見直している。単に重版・再版するだけで無く、内容を新しいものにして、最新の研究を盛り込みたい」と、言われていました。

それらが、突然の病で果たされず、ご本人はさぞ残念で、無念であったと思います。

「平間街道に行く」という連載も面白く、もう一度読みたいものでした。

大坪さんの著作の中では、「六郷用水をたずねて―地域から歴史をさぐる―」「六郷用水物語」があり、それらは絶版で、もう入手不可ですが、この著作ほど大きな影響を与えたものは無いでしょう。

「六郷用水」については、「呑川」と同じように、断片的な記述をしたものはいくつもありますが、古文書を解明し、全体を俯瞰してまとめ、一般向けにも判りやすく書かれたものは、これが初めてだと思います。

大坪さんの、この著作で、「六郷用水」というものの存在が一部の歴史マニアだけでなく、一般に広く知られ、幅広い研究を呼び起こした・・とも言えるでしょう。

そして、いまや「六郷用水の会」が生まれ、小学校の必修項目にまでなっているのです。

まさに「東京・歴史教育者協議会」の「会長」ならではの真骨頂でした。

そして、単に「研究」をして「本」を発行するだけで無く、「現実を変える活動」にも大きな力を発揮されました。



ここは「六郷用水」の「復元水路」です。

「復元水路」と言っても、実際の「用水幅」を復元したもので無く、半分位の流路幅にとどまりました。

歴史をキチンと伝える上で、実際の幅を確保することに意味があり、それが重要と、「歴史教育者協議会」も「大田・郷土の会」（のちの「大田区・郷土の会」）も、大坪さんたちが主導して行政に働きかけました。その結果、「東光院」付近の「六郷用水」の幅は、実際の幅となって実現されたのです。

研究者・学者を職業とする方も多くいます。研究者で無くても、職務として、研究的な役割を果たす方も少なくありません。しかし、市井の人で、これだけの研究を行い、市民向けの啓蒙活動や、行政への働きかけ、学校教育への協力活動を行った方はきわめて少数だと思います。

研究者・学者を職業とする方も多くいます。研究者で無くても、職務として、研究的な役割を果たす方も少なくありません。しかし、市井の人で、これだけの研究を行い、市民向けの啓蒙活動や、行政への働きかけ、学校教育への協力活動を行った方はきわめて少数だと思います。

これだけの気骨を持つ方は、もうそう簡単に現れることは無いでしょう。大坪さんは、本当によく頑張り、努力をし、人々に優しく接した方でした。

まさに「巨星、墜つ!」でした。

大坪さんのたくさんの業績や資料を、残されたものが引き継ぐ必要があります。

奥さまも、そういう要望をされました。

さいわい、長島さんが資料整理をしてくださることになりました。

おおまかな仕分けが出来たところで、「呑川の会」を含め、関連各団体に順番に声を掛けてくださるそうです。

6) 大坪福子さん (奥さま)



「前夜式」の最後に奥さま（大坪福子さん）が、挨拶をされました。

夫は「まるで子どものように」、何ごとにも夢中になり、一生懸命だった・・・と表現されました。まさに「少年」のような心を持ち続けたことが、人に慕われ、がんばりになり、それがお身体に無理を招いてしまったのでしょう。

でも、奥さまは夫の活動の詳細までは、存じ上げなかったようです。

ですから、関連する団体やグループの方々が、大坪さんが活動されている写真を探し出し、提供することが、奥さまが知らなかった一面を見る大切な思い出になると思います。

奥さまは、とてもさばさばした方で、夫の死を乗り越えられたように見えました。「今まで、家庭に縛られ、自由が少なかったので、お友だちが私を引っ張り出そうと声を掛けてくださるの・・・」それはそれでとてもうれしいことだとおもいます。前夜式のあいだ、とても気丈に振る舞われ、周りをホッとさせてくれました。

でも、それは周りへの気遣いでもありました。私は、ここ数ヵ月間の大坪さんの激しい病状を振り返り「とても残念でした。悔しいですね。」と声を掛けましたら、「本当に悔しいです。こんなつもりで無かったのに、あつと言う間に事態が進んでしまいました・・・」と、答えられました。福子さんのお気持ちは、大きな戸惑いのさなかにあり、まだ現状をそのままには受け止められず、とても整理のつくような状態で無いことを素直に答えられたのです。

もっとたくさん、話したいことがあったでしょう。

もっとたくさん、あちこちに出掛け、楽しみたいこともあったでしょう。

これからの人生について、深め合いたいことも多かったと思います。でも、急激な病状の進行は、それを許してはくれなかったのです。それは、なんと悔しいことだったでしょう。それは、悔やみきれないほど、残念なことだったのだと思います。

ただ、ただ、神のみもとにある大坪さんが、奥さまやお子さまを見守ってくださることを祈るばかりです。そして私たちは、今までの活動に感謝を捧げるばかりです。

さようなら、大坪さん、ありがとうございました。

(心を込めて、この文を、神のみもとにある大坪さんにお送りします。)